

プログラム・ノート

鄭 理耀

ニューヨーク・ナショナル音楽院の院長として、アントニン・ドヴォルジャーク(1841～1904)は1892年に祖国チェコを離れアメリカへ旅立ちます。アメリカでは黒人の民謡の影響を強く受けながら、重要な作品をいくつも生み出しました。大作の交響曲「新世界より」の後、夏休みにチェコ移民が多く住むアイオワ州スビルヴィルを訪れ、一気に書き上げたのが弦楽四重奏曲第12番「アメリカ」です。第1楽章は、晴れやかで希望に満ちています。

ドミトリー・ショスタコーヴィチ(1906～75)は、第二次世界大戦中の1944年、友人で音楽学者・評論家のソレルチンスキーが避難先で急死したことを悲しみ、ピアノ三重奏曲第2番を完成させました。作品全体には、戦争やユダヤ人弾圧への怒りがこめられているとされます。第4楽章はヴァイオリンのピッツィカート(指で弦をはじく奏法)で始まり、続いてピアノで突然力強く奏される旋律は、この楽章の不気味な色調を強めています。

ヨハネス・ブラームス(1833～97)のピアノ四重奏曲第3番は、恩師ロベルト・シューマン(1810～56)がライン河に身を投じ精神病院に収容された後の1855年に構想され、その後長い月日と複雑な成立過程を経て、1874年頃ようやく現在の形に仕上げられました。第3楽章では、はじめにチェロによってしっかりと歌い上げられる極上の美しさを帯びた旋律が心に染み渡ります。全体的におだやかで優美な雰囲気を持ち、静かに曲を閉じます。

1842年に作曲されたシューマンのピアノ五重奏曲は、ロマン派室内楽の最高傑作に数えられます。「ピアノと弦楽四重奏」という編成は当時あまりなじみがありませんでしたが、この作品をきっかけにロマン派と呼ばれる19世紀の時代に盛んに作曲され、名作が次々と誕生していきます。第3楽章は、音階を上下する、何もかも吹き飛ばしてしまいそうな躍動感あふれるスケルツォです。

フェリックス・メンデルスゾーン(1809～47)がわずか15歳の時に書き上げたピアノ六重奏曲は、死後1868年に初めて出版されました。ピアノがまるで協奏曲のソロを弾いているかのように、終始華々しく活躍します。さわやかで優雅な第1楽章からは、若き天才の成熟した音楽の世界をのぞき見ることができます。

(ちよん りよ・音楽学)